

Lesson 4

Messages from *Winnie-the-Pooh*



A.A.ミルン（右）と、息子のクリストファー・ロビン（左）

1. A.A.ミルンについて

A.A.ミルン（アラン・アレクサンダー・ミルン）はイギリスの作家で、1882年1月18日にロンドンで生まれた。1888年に父が経営するヘンリー・ハウス・スクールに入学。その後ウエストミンスター・スクールに進み、ケンブリッジ大学トリニティー・カレッジでは数学を学んだ。

大学に入学後、学生雑誌「グラント」の編集長となり、作品の執筆などに携わる。また、学生時代から風刺雑誌「パンチ」にも作品が掲載された。大学卒業後はさまざまな雑誌に作品を寄稿する一方、「パンチ」で編集アシスタントとしても働く。

1913年にダフネと結婚した後、ミルンは「パンチ」からの脱出を考え、劇を書くようになる。第一次世界大戦中は兵営の娯楽用に昔話風の劇を書くが、戦後は探偵小説の執筆や劇評なども行っていた。1920年、息子クリストファー・ロビンが誕生。同年、「ピム氏が通る」*Mr. Pim Passes By*という劇で成功を収める。

ミルンが子ども向けの本を書くようになったきっかけは、1922年に妻ダフネへ贈った「夕べの祈り」*Vespers*という詩である。これを書いた数か月後、子ども向け雑誌に「やまねとお医者」*The Dormouse and the Doctor*という詩を書く。この詩の読者から子どもの詩の単行本を出すことを勧められ、出版した作

品が『ぼくたちがとてもちいさかったころ』*When We Were Very Young* (1924年)であった。E.H.シェパードが挿絵をつけたこの童謡集（詩集）は、間もなくベストセラーとなり、その後同様にシェパードが挿絵を担当した『クマのプーさん』*Winnie-the-Pooh* (1926年)、『ぼくたちは六歳』*Now We Are Six* (1927年)、『プー横丁にたった家』*The House at Pooh Corner* (1928年)を出版。ミルンの作家としての地位は確固たるものとなった。

これら一連の作品でミルンは大成功を収めたが、彼にとって子どもの本は偶然の所産であり、自分の本領であるとは考えていなかった。以後ミルンは1つの例外を除き、子ども向けの作品を執筆することはなかったが、その後の作品で大きな評判を得ることはできなかった。

晩年は心臓発作や、脳の手術による車いす生活などを強いられている。1956年1月、74歳で生涯を終えた。

2. E.H.シェパードについて

E.H.シェパード（アーネスト・ハワード・シェパード）は、1879年にロンドンで生まれた。建築家の父を持ち、幼いころから画才を見せた彼は、王立美術院学校で学ぶ。その後、1904年に「パンチ」の創始者を祖父に持つフローレンスと結

婚。一男一女をもうけた。フローレンスとはその後 1927 年に死別し、1943 年に二番めの妻ノーラと再婚している。



E.H.シェパード

在学中からミルン同様「パンチ」への掲載を目指して活動し、1907 年に初めて風刺漫画が掲載されると、1914 年までには定期寄稿者となる。さらに 1921 年からは編集にも携わるまでになり、シェパードにとっての「パンチ」との関係は 1953 年まで続く長いものとなった。

挿絵画家としてミルンの作品を担当する頃からシェパードは既にその地位を確立していたが、『ぼくたちがとてもちいさかったころ』の挿絵が好評を博したことから、以後、他の作家の作品の挿絵にも多く携わる。

代表的な仕事として、ケニス・グレアム『たのしい川べ』*The Wind in the Willows*の 1931 年に出版された新版や、リチャード・ジェフリーズ『ビーヴィズ』*Bevis*の新版(1932 年)があげられる。

1976 年に 96 歳で死去。亡くなる直前までプーの絵を描き続けた。

3.『クマのプーさん』の作品について

『クマのプーさん』は 1926 年に発表

された児童物語である。ハチミツが好きなクマのぬいぐるみのプーと森の仲間たち、そしてクリストファー・ロビンとの日常が 10 編のエピソードに描かれている。発表当時から広く人気を集め、多数の言語に翻訳されている。また、1960 年代からはディズニーによってアニメーション化された(ただし、一部キャラクターの設定などが、原作とは異なっている)。

前書きでは、前著である『ぼくたちがとてもちいさかったころ』に触れるとともに、クマに「Winnie-the-Pooh」と名付けたいきさつや、キャラクターのピグレットについて書かれている。

童謡集『ぼくたちがとてもちいさかったころ』は、3 歳の息子クリストファー・ロビンのために作られた童謡など 44 編を集めたものである。本作にもクマのぬいぐるみは登場するが、プーは白鳥の名として付けられている。その後、6 歳に成長したクリストファー・ロビンのために作られた童謡 35 編を集め、『ぼくたちは六歳』も作られた。プーの登場するミルンの作品のうち、この 2 作は童謡集で、児童物語集としては、『クマのプーさん』の後に『プー横丁にたった家』が 1928 年に出版されている。

4. キャラクター

『クマのプーさん』には、さまざまなキャラクターが登場する。どれもユニークで、魅力にあふれている。

プー (Winnie-the-Pooh)

ハチミツが大好きなクマ。礼儀正しく、仲間思いでやさしい。ご馳走に目がなく、何度もピンチにおちいる。よく即興で詩

を作って歌っている。「いやんなっちゃう！」が口癖。

クリストファー・ロビン (Christopher Robin)

森 (100 AKER WOOD) で一番かしこい少年。みんなに公平で、いつもやるべきことがわかっているため仲間たちに頼りにされている。好きなことは「なにもしていないでいること」。プーを敬愛している。

ピグレット (Piglet)

控えめで気は小さいが、仲間思いのこぶた。時々勇気を出して仲間を助ける。プーの親友で一番の理解者。どんぐりが好物。

イーヨー (Eeyore)

心配性でとても悲観的な性格のロバ。じめじめした「しめっ地」で暮らしている。損な役回りになってしまうことが多い。仲間たちと過ごすようになり少し前向きになった。

トラー (Tigger)

元気なはねっかえりのトラの子。強気な言動で森に騒動を起こす。『プー横丁にたった家』で、一番最後に仲間に加わる。絶対に道に迷わない。

ウサギ (Rabbit)

いつも予定があってせわしないうさぎ。みんなをまとめるのが大好きな仕切り屋だが、実はそそっかしい。たくさんの「親せき友人」がいる。

カンガ&ルー (Kanga & Roo)

カンガルーの親子。母親のカンガは愛

情深く面倒見がいい。トラーの面倒も見ている。子どものルーは好奇心旺盛。ルー坊と呼ばれている。

フクロ (Owl)

森で一番物知りのフクロウ。読み書きもでき、仲間に頼りにされている。難しい言葉を好んで使い、いつも話が長い。「いげん」を大切にしている。

5. プーのモデルについて

クマのプーは、クリストファー・ロビンが持っていたクマのぬいぐるみがモデルになっている。このぬいぐるみは、クリストファー・ロビンが1歳のときに誕生日プレゼントとして購入されたものである。



テディベアを持ったクリストファー・ロビン

キャラクターのもとになったぬいぐるみは他にもあり、イーヨーはクリストファー・ロビンが1歳のときのクリスマスプレゼント、ピグレットは隣人からプレ

ゼントされたものである。また、執筆が進むとミルンは新たにカンガとルー、トラのぬいぐるみを購入した。それに対し、ウサギとフクロは特定のモデルが存在せず、ミルンが創り出したものである。作中で、人間であるクリストファー・ロビン、そしてウサギ、フクロ以外のキャラクターがぬいぐるみという設定になっているのは、以上のような経緯がある。

「Winnie-the-Pooh (ウィニー・ザ・プー)」という名前は 2 種類の動物の名前に由来する。

まず「ウィニー」は、当時ロンドン動物園で人気だったメスの黒いクマの名前であった。このクマはもともと、カナダの砲兵第 2 旅団に獣医師として所属していたハリー・コルバーン中尉が飼っていたクマである。



コルバーン中尉とクマのウィニー

彼は第 1 次世界大戦の戦地へ向かう途

中、猟師が連れていた孤児の子グマを購入する。その際、中尉の故郷ウィニペグ (Winnipeg) にちなんでクマを「ウィニー」と名づけた。その後コルバーンの隊はクマとともにイギリスに渡るが、隊のフランス進駐に伴い、ウィニーはロンドン動物園に預けられることとなる。動物園でそのクマを見たクリストファー・ロビンは、ウィニーが大のお気に入りとなる。囲いの中に入ることが許され、一緒に遊ぶこともあったそうだ。

一方、「プー」はクリストファー・ロビンが白鳥に付けた名前に由来する。この白鳥は、親子が訪れていたウエスト・サセックスのポーリングにいた白鳥である。

クリストファー・ロビンは彼のぬいぐるみに名前を付ける際に、この 2 種類のお気に入りの動物の名前を付けたのだった。

先述の通り、プーの物語はクリストファー・ロビンが持っていたぬいぐるみがモデルである。一方、挿絵として描かれたプーは、シェパードの息子が持っていたクマのぬいぐるみがモデルとなっている。クリストファー・ロビンのクマはほっそりしているのに対し、シェパードの息子のクマはふっくらとしており、後者の方が物語の主役に適していたためモデルとして選ばれたのだ。

6. 内容について

『クマのプーさん』は、作者の A.A. ミルンが、息子のクリストファー・ロビンとぬいぐるみのクマのプーに、プーが出てくる話を語って聞かせるという形で始まっている。プーの暮らす森を舞台に、森の仲間たちとの間で起きたできごとな

どが綴られている。以下、一部の章について、あらすじを紹介しよう。

前書きに登場したプーとピグレットのやりとりは、『クマのプーさん』の第5章で語られている。この章で、プーとピグレットはゾゾ（Heffalump）という正体不明の生き物を捕まえようともくろむ。落とし穴を掘り、底にハチミツの壺を置いてゾゾをおびき寄せようと考えたのだ。だが、翌朝おなかが減って目覚めたプーは、穴の底に仕掛けたハチミツを空腹に耐えかねてすべて食べ、顔まで壺にはまってしまう。ようすを見に来たピグレットは、その姿を見てゾゾだと思い込み、クリストファー・ロビンに助けを求める。しかし、壺が割れて出てきたのはプーだった。それを見たクリストファー・ロビンが「ああ、プー・クマ！」「ぼくは、きみがとってもすきなんだよ！」と言うと、プーは「ぼくだってさ。」と返したのだ。

第8章と第9章では、プーの活躍が書かれている。第8章では、クリストファー・ロビンと森の仲間たちが北極（ノース・ポール）への探検に出発する。クリストファー・ロビンの思いつきを聞いたプーが森の仲間たちに伝え、行列ができるほどに集まった。しかし、北極がどんなものかわからない彼らは、棒（ポール）ではないかと考える。そんなことを話しながら進むうちに、ルーが水たまりに落ちてしまう。プーはどこからか棒を持ってきて、ルーを助け出した。それを見たクリストファー・ロビンは、「探検はおわった。きみは、北極を発見したんだよ。」と言ったのである。第9章では、大雨によって森に洪水が起こり、ピグレットが窮地に陥る。ピグレットは瓶に助けを求める手紙を入れ、水に浮かべた。そ

の瓶を発見したプーは字が読めるクリストファー・ロビンに見せる。洪水のため助けに行けずに困っていると、プーは傘を逆さにして乗ることを思いついた。この機転のおかげで二人はピグレットを助けることができたのである。

トラーが初めて登場するのは『プー横丁にたった家』の第2章である。夜中に物音がしてプーが起きると、玄関にトラーがいた。プーの家に泊めた翌朝、トラーが何でも好きだと言うのでハチミツをあげたが気に入らない。そこで仲間たちを訪ね、彼らの好物を与えてみるがどれも嫌がってしまう。最後に、ルーの強壮剤である麦芽エキスをなめると、それがトラーの好物だとわかった。それからトラーは、カンガの家になるようになった。

7. クリストファー・ロビンの成長と別れ

『プー横丁にたった家』では、クリストファー・ロビンが成長しつつあることが示唆される。第5章では、近頃クリストファー・ロビンを午前中に見かけることがなくなったことが、森の仲間たちの間で話題になる。するとイーヨーの口から、「あの人は、学問をしとるのじゃ。あの人は、教育をうけとるのじゃ。」と不在の理由が明らかにされる。最終章での別れは、すでにここで暗示されていた。

そして最後の第10章では、クリストファー・ロビンが森から離れ、森の仲間たちと別れることとなる。クリストファー・ロビンが成長し、学校に行かねばならない時がやってきてしまったのである。そこで仲間たちは別れの挨拶として「きつぎ文」（決議文）を贈った。彼がそれを

読んでいる間に仲間たちは去っていき、残ったのはプーだけになる。プーとクリストファー・ロビンはギャレオンくぼ地に行き、さまざまなことを話す。クリストファー・ロビンはプーに「何もしていないこと」ができなくなったと言い、別れを告げる。

これが『プー横町にたった家』の最終章であるとともに、ミルンの書いたプーの最後の物語となった。

写真提供

■PPS 通信社

参考図書・ウェブサイト

■『クマのプーさん』A.A.ミルン作 石井桃子訳 岩波少年文庫

■『プー横町にたった家』A.A.ミルン作 石井桃子訳 岩波少年文庫

■『プーさんとであった日』リンジー・マティック文 ソフィー・ブラッコール絵 山口文生訳 評論社

■『クマのプーさんと魔法の森へ』猪熊葉子監修・文 中川祐二写真 求龍堂

■『クマのプーさん 原作と原画の世界』アンマリー・ビルクロウ エマ・ロウズ（公財）東京子ども図書館 阿部公子日本語版監修 富原まさ江訳 玄光社

■月刊「MOE」2019年3月号 白泉社

■新潮社 HP

アラン・アレクサンダー・ミルン

<https://www.shinchosha.co.jp/writer/4818/>

■Bunkamura HP

クマのプーさん展 キャラクター紹介

https://www.bunkamura.co.jp/museum/exhibition/19_pooh/character.html